

いふにある。〔以上菅原〕

●支那古明器泥象圖說

文學博士 濱田 耕作著

著者曰く、支那の泥象は希臘のタナグラの泥象と同じく當代の大藝術と社會的生活とを反映せる小藝術なり小社會なり、此の謙讓にして可憐なる形像は之を美術的作品として愛玩するに足る可く、歴史の參考として貴重するに餘あり」云々云へる此支那古代の明器泥象は實に十數年前までは支那考古學の典籍を始め其の遺物に接するものがなかつた。然るに今や東西諸國の博物館と個人との間に壟藏せらるゝもの其の數幾何なるを知らざるほどの出現を見てゐる。これ主として一九〇五年以後敷設せられた汧洛鐵道が支那洛陽附近の古墳群を縱斷するもの、所産に外ならぬものであるが其の蒐集熱は單に洛陽附近に止まらず西安其他の地方にまで及んでゐる。此等發見の明器泥象は外人にあつてはシャヴァンヌ、ラウフェル支那學者にあつては羅振王氏等の逸早く紹介さるゝも、

のがあるが其の副葬狀態を明にするものが少い。

著者は京都帝國大學文學部にあつて明治四十三年洛陽に於て若干を獲得して以來、此種を蒐集するもの百數十に越へ或は親しく發掘せる漢代墳墓のもの或は世間稀に觀るもの、少くない爲に其の主要なるものを選集して四六倍版唐本仕立の上下二冊とし上冊には精巧なる玻璃版に收むるもの約八十葉、數葉の原色版を加へ、下冊には約七十頁に互つて明器泥象の總論と例品の解説とを附されてゐる。著者の云へる「一は以て支那考古學上顯著なる遺物の一般的概念を與へ、一は以て大學所藏品の目錄たるの用に供せん」とは直に以て美術考古の資料として學界を裨益するもの鮮少ではないと確信する。總論を分ちて十の泥象の出現から説述して其の製作の動機に及び次で漢、六朝、唐各代の各種明器泥象の發達と特徵とを或は石彫に或は繪畫に彫刻に類推して其の細を究め支那泥象の研究は其の最盛期たる唐代にこれに到達せんとする準備努力の時代である漢六朝のそれを考察するの要を説き、其手法の佛像彫刻と相並行するの事實を擧げ

特に六朝泥象の體側線が腹腰部に於いてやゝ前に挺出し、顔面の狹長、口唇に古拙的微笑を含めるものゝあるは當代佛像のそれと全く相似の世相を反映するものであつて佛像彫刻のそれと姉妹的關係あることを多くの例證によつて説破されてゐる。こゝは最も敬服すべき論述の一つであらう。又た解説目録は男女人物類、鬼頭及動物類、家屋器用類に分ち一々の解説の配置行文は著者の苦心が窺はれる。繁雜にして形式化せんとする此種解説文に一新例を築かれたもの云ふべきであらう。著者は希臘泥象に云へるユーゼー氏の言を引きて「その美しさは必しも實際の世界を現せる故には非ず、寧ろ實際に空想の世間の間を彷徨する處にあり、誰か殘酷なる學術の手を加へて此の可憐にして脆弱なる像を破壊するものぞ」云々は蓋し著者にして始めてユーゼー氏を知るもの云ふべきか。(京都市寺町夷川、桑名文星堂發行、價拾八圓)

● 日本原人の研究

醫學博士 清野謙次著

大正六年、京都帝國大學の濱田博士によつて河内國府石器時代遺跡から三體の人骨發見あつて以來、吾が先史考古學は一時期を劃した。爾來數年、日本全土に亘つて採集さるゝ人骨は約一千體の多きに及び其の約半數は著者の多大の勞力にて獲得せられたものであることを想到する時には著者は既に醫界に於ける業績は別として人類學考古學方面に貢獻する偉大なるものあることを直感される。著者は今や着々として其の正式報告の研究に没頭されてゐる。此等の堅實な資料に築き上げられる吾が古代人骨は吾が人種上に如何なる使命を傳へるものであらうか。蓋し吾が古代文化を研究するものにまつては一大指針を與へるものであらう。本書は此等の基本となるべき人骨發見其他の資料編とも見るべきもので、著者は單に備忘録に過ぎないと思はれてゐるが、著者の云へる「下らぬ考説や獨斷は抜きにする」と斷つてあることは備忘録そのものが有力な資料を提供するものであつて著者の眞意が那邊にあるかを裏書きせしめるもの云へよう。本書は四六版、本文三六四頁數葉の玻璃版を挿入し項を分

つて「日本の海灣ミ貝塚の分布」「日本の貝塚ミ石器時代墓地」「人骨採集ミ人事關係」「貝塚及古墳の發掘」「發掘余論」「僕等の蒐集し得た日本古人骨」其他附録を以てして凡て著者自らの貴重なる體驗によつて記述されたものである。ここに本書の出色を認められる。行文平易且つ興味的に叙述し、一言一句の美辭麗句を使用せずして人をして讀ましめる處に著者其人の面目が窺はれる。蓋し本書は日本人種想定の資料編として單に著者のみの備忘録に止まることなく吾が古代民族成立の概念を知らんことをものにまつては見逃すことの出来ないものであらう。(東京四谷、岡書院發行、價貳圓七拾錢)

●奈良縣史蹟名勝記念物調査會報告

(第八回)

奈良縣下に於ける御陵墓、同傳説地及古墳墓の所在名稱、形狀、地目、面積等を細別表示したものである。主として同縣屬であつた故野淵龍潛氏の踏査に係るものを基礎とし、これに同縣調査委員の補遺修補されたもので

あるが同縣下の古墳整帳として斯學者に便益を與へるものである。(菊版一二六頁、奈良縣發行)

●東京府史蹟名勝天然記念物調査報告書

第三冊

本冊は東京府下の主要なる史蹟に就て調査發表せるものであつて本冊に收むるものは主として各郡所在の城址寺院、館址を以てし就中かの集古十種に所載されてゐる御嶽神社藏の什器に就て詳述されてゐる。其外調布村下沼部の古墳ミ南足立郡伊豫村の兎發見の特殊な遺跡を舉げてゐる。要するに本府は武藏國の大半を治し江戸幕府三百餘年の政治の中心であつた處であるから其の史蹟は大半鎌倉以降に屬するものが多いことは他の京都府や奈良縣等ミ異つてゐる處である。この異つてゐる處が本府史蹟の特色ミする處であつて例へ年代の古るさに於て或は遺物の質に於て劣るこゝもあるとも、そこに江戸幕府三百年の基礎が見出さるゝものであらう。(四六倍版、東京府發行)

●熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告

第二冊

本報告書の内容を分つて同縣下に於ける銅劍銅鉾の調査、石人、其の表飾の古墳、發掘せられたる主要古墳調査の三項に附するに熊本市春日町北岡神社出土の石骨に就て清野謙次博士の詳密なる報告を以てせられてゐる。前の三項は同縣調査委員古賀、下林兩氏に加ふるに梅原末治氏のあるあつて其の努力に負ふもの頗る多きを見るものである。銅劍銅鉾が所謂筑紫鉾として特殊の分布状態にあることは一方銅鐸のそれと相待つて吾が上代に於ける著しき遺物の一であることは云ふ迄もない。同縣下に發見する十六口に就て其の詳細を報じ此の種の遺物ほも一種の利器として前漢代に支那より傳へられ、これを受けし北九州地方の住民は當時尙ほ石器使用の文化階段にあつた爲に該遺物を貴重視し、次で自ら同様の銅器を製作するになつても利器としてよりも漸次その性質を轉換して形大異様のものを作り上げ一種の宗教的所産とな

つたもので該遺物使用の年代は恐らく彌生式土器使用の原日本人であつて王莽を中心とするものがその盛行期ではなからうか。併出遺物の彼此研究によつて持論を進め石人、其の表飾古墳に於ては同じく特殊の發達を見せてゐる此地方墳墓が既に京都帝國大學考古學研究報告第一第三兩冊に説述されてゐるが本冊には石人に就て概述してゐる。此等の石人は單り本縣のみに止らず筑後に其の豊富を見るものであつて兩者を通觀して始めて其の完成を期すべきもののこの前提に石人を伴ふ墳墓は慨して前方後圓墳にして内に石棺を藏し副葬品によつて類推するに六朝中期に置くの妥當なるを告げ、石人そのものは埴輪偶人と同一性質のものであつて此の特殊なもの、發達は阿蘇溶岩の地理的分布に負ふもの多きとされてゐることは傾聴すべき言であらう。次に發掘されたる主要なる古墳として熊本市北岡神社の古墳、菊池郡久米の石棺、上益城郡小坂の大塚古墳、宇土郡檜崎の古墳、玉名郡繁根木の古墳等に就て詳述されてゐるが就中、檜崎の四棺並列、北岡神社の箱式棺等は興味ある資料を提供するもの

彙報

である。此北岡神社境内の箱式棺發見の二體人骨に就て清野博士の精細なる正式報告が最後に載せられてゐる。

博士は石器時代人骨、現代アイノ及び現代日本人骨等ミ比較研究して本古墳發見人骨が吾が石器時代人骨に近似するものがあるこされてゐるのは吾が古代の人種問題解決に寄與する處が少くないこされる。(菊版本文百十二頁、圖版五十葉、熊本縣發行)

●大和の特建・國寶・石佛 上田三平編

大和にある特別保護建造物並に國寶等は日本全數の約一割半を占めてゐる。本編はそれらの所在品目を旅行研究者の爲にポケット形におさめたもので約八十頁を以てし主として同縣廳にある國寶臺帳、奈良縣金石年表等によつて市郡別に分類記載せられたものである。卷末に附するに逆算年表を以てしてゐるのは旅行研究者にまつて調法であらう。(奈良、飛鳥閣發行、價七拾錢)(以上島田)

●皇太子殿下の行啓と台覽品

去る五月十七日皇太子殿下我京都帝國大學に行啓あらせられ、諸種の學術參考品を台覽あらせらる。其際の台覽品にして文學部に屬するもの及び其の説明左の如し。

南北合體條件を記せる足利義滿の書狀(公爵近衛文磨寄託)

教授 文學博士 三浦周行説明

南北朝の合體は歴史上の重要問題なるも、從來未だ其の條件を詳かにせざりしが、本書一たび出でて始めて其の真相を明かにするこを得たり。本書は南北合體に幹旋せる義滿が、同じく南朝の阿野實爲に贈れるものにして後龜山天皇より後小松天皇に三種の神器を傳へらるゝに際し、讓位の儀式を以てすべしこの南朝の提議に同意を表せるこを始め、他の記録の載せさる新事實を傳ふる貴重史料なり。